

婚約破棄された悪役令嬢は自由に生きようかと。

〜気分転換に冒険者になったら指導担当が

最強冒険者で学園のイケメン先輩だった件〜

Characters

ミカエル

ハルヴェアル王国の第一王子。

ジュリエット

子爵家令嬢。
乙女ゲームのヒロイン。

ルクト

最年少Aランク冒険者。
最速ランクアップ
冒険者としても有名。

レベッコ

冒険者ギルドの職員。
仕事のできるクールビューティ。

ネテイト

リガッティーの義弟で、
ファミラス侯爵家の跡継ぎ。

リガッティー

ファミラス侯爵家の令嬢で、
第一王子ミカエルの婚約者。
ミカエルから婚約破棄を言い渡された瞬間、
前世の記憶が蘇り、
ここが乙女ゲームの世界であり、
自分が悪役令嬢転生していることを知った。

第1章 婚約破棄イベントは断罪未遂。

1 断罪の最中に思い出した。

ストン。

そんな軽い音が相応しいくらい、簡単にその情報は頭に入ってきた。

情報——前世の記憶。

こんな膨大な情報が一気に入ってきたのに、不思議と衝撃がない。逆に衝撃がないことに、衝撃を受けて、少々固まってしまった。

ほぼほぼ実力主義で、貴族であろうが平民であろうが切磋琢磨していく、ミッシェルナル王都学園の進級祝いパーティーの最中。

ここハルヴェアル王国の第一王子であり、私の婚約者でもあるミカエル・デイエ・ハルヴェアル様が、声高らかに私に婚約破棄を言い渡した。

前世で見たことがある光景だけれど、それとは異なる。今日にしているのは、悪役令嬢である私

視点だ。

前世で遊んだ恋愛シミュレーションゲーム『聖なる乙女の学園恋愛は甘い』の、クライマックスシーン。

悪役のポジションである侯爵令嬢リガッティ・ファマス——つまり私は、ミカエル殿下の隣に立つヒロインポジションの令嬢——子爵令嬢ジュリエット・エトセトに、あらゆる嫌がらせをおこない、さらには魔法で危害を加えたと糾弾され、王子の婚約者に相応しくないと訴えられたのだ。つまり、王家とファマス侯爵家とで交わした婚約が破棄されるのは、全面的に私に非があると主張しているのである。

意図的にそう仕向けているのか、考えなしに発言しているだけなのかはわからないが、最早大事になっっているので、取り返しがつかない。

ちなみに、ゲームにおけるミカエル殿下は、オレ様キャラ枠の攻略対象。自分が正しいと我を貫く性分で、負けじと自分の我を貫こうとするヒロインが可愛く見えて、コロツと心を奪われるのである。こうして、現実で見ると、チョロすぎて、この国の未来がとんでもなく心配だ。

独りよがりな正義感に突き動かされた王子様は、烈火のような赤い髪と瞳を持ち、色気もまとう長身の美少年だ。

その隣に立つのは、ストレートのハニーブロンドに、水色の瞳、そして優さと可愛さを持った美少女、ジュリエット。

彼らの後ろには他の攻略対象キャラも控えている。悪者に立ちほだかる正義の味方の如く——の配置である。

そのうちの一人は、ツンデレシヨタキャラ枠の我が義弟——ネテイト・ファマスだった。

ミカエル殿下の婚約者である私は将来王妃になる予定だったが、我が家に子どもは私一人。そのため、義弟は次期ファマス侯爵となるべく引き取られ、育てられたのである。

ふわふわとした天然パーマの髪はベージュで、小柄なことがコンプレックスの一学年下。仲はそこそこよかったと自負していたが、ミカエル殿下とジュリエットが親しくなっただけからは、怪訝な顔でこちらを見始めて……それが不機嫌顔に変わったあとは、もう顔を合わせる度にイライラした様子だった。

確かゲームシナリオでは、我が義弟ネテイト・ファマスは、悪役令嬢の姉との不仲が原因で、少々擦れていた。そこをヒロインに根気強く接され、心を奪われた……はず。……私とネテイトは、仲が悪かった覚えがないのだけど……？ 確かに最近では反抗期っぽい態度ではあったけれど……どうやってヒロインは味方につけたのやら。

まあ、ネテイトはミカエル殿下の側近だから、そちら側に立っているのかもしれない。

ネテイトだけではない。

ミカエル殿下の側近で、護衛騎士を目指しているケーヴィン・デライトン伯爵子息。髪は茶色で、瞳は深い青色。前髪を上げて額をさらしており、腰にはしっかりと剣を携えている。こちらでもまた

私を睨みつけている。

彼も攻略対象キャラで、ゲームでは確か……一見、爽やか陽キャラだけれど、裏では騎士団長を務めている父親との力量差を感じ、死に物狂いで努力している。それを隠して笑って過ごしていたが、ヒロインがその努力を見抜いて褒めたことで、コロツと心を奪われたのだっけ。……誰だって人知れず努力しているでしょ、当たり前じゃないの？ チョロい。

さらに横にいるのは、クーデレ梓の攻略対象キャラである現宰相の息子、ハールク・デリンジャー侯爵子息。勉強を必死に頑張るヒロインの面倒を見てやり、その最中に知らず知らずのうちに微笑んでいたことを指摘され、赤面しつつもやはり心を奪われる。元々、表情筋が死んでいるのかってほど無表情だから、些細な表情変化に気付いてもらえて、嬉しいという……チョロい。

そんな攻略対象キャラが、揃っているということは……え、何？ 逆ハールム狙い？ 絶対にヒロインも転生者でしょ。

百歩譲って、全攻略対象キャラの好感度をマックスにして、逆ハール状態にしたことは、よしとしよう。

だが、しかし。今、挙げられた罪状は、全て濡れ衣である。

ジュリエットと関わったのは、苦言を呈した時くらいだし、なんなら他の貴族令嬢である友人達を宥めた側だけど？

今だって、ケーヴィン様とハールク様の婚約者である令嬢が青ざめたり、怒りで真っ赤になったりしているところを、他の令嬢達が落ち着かせていますけど？
今にもこちらに駆け付けてこようとしている友人達に、私も掌を向けて落ち着けと必死に抑え込んでいるところだけど？

仮にも王族だ。対立するのは、賢明ではない。事態が悪化するだけだから、どうか堪えてほしい。戸惑いっぱいの教師陣と、呆れ果てた顔をしている学園長に、この場は任せてほしいと目配せをする。

「ミカエル殿下のお気持ちはわかり」

「やめて!! 闇魔法を使わないで!!」

「……は？」

婚約破棄の意向は伝わったと言いかけた時、ジュリエットがミカエル殿下の前に飛び出して、庇うように両腕を広げた。

私は思わず、低い声を零してしまう。

ミカエル殿下とその側近達が険しい顔になり、身構える。

シーン……

当然、私は闇魔法を使うつもりなどないので、何も起こらず、パーティー会場は静まり返った。

「……なんの真似でしょうか？ ジュリエット様」

私はすっと目を細めて、冷えた声で尋ねる。

「だって、闇の気配がしたからっ」

気まずそうな表情を一瞬見せたが、ジュリエットは怯える被害者のように身を縮めた。

「光属性の魔法の適性を持つジュリエットが、お前の闇属性の魔法を感知したのだろう!? ジュリエットは、お前の闇魔法の暴走を恐れていたからな!」

ミカエル殿下は、ジュリエットを擁護して、私から離すように彼女を引き寄せる。

ほうう……? 闇魔法の暴走を懸念していた、と?

確かに、私は闇属性の魔法の適性があるし、使える。

一方、ジュリエットは光属性の魔法の適性持ち。どちらも、希少ではあるが、光属性の方が、やはり重宝される。魔法ファンタジー系ヒロインのあるある設定だ。

そして、ゲーム上の悪役令嬢リガッティは、この婚約破棄の断罪シーンで、闇魔法を暴走させる。それをヒロインが光魔法で抑え込み、みんなを守るという展開になるのだ。

だが、いくらゲームのとおりに進めようとも、私は罪を犯していない。それは、生まれながらに私が私だったからだろう。前世の記憶がなくても、私の魂は変わらない。

よって、ゲームどおりの悪行なんて、働いていなかったのだ。

罪を犯しておきながら、婚約破棄されたことに逆上して、闇魔法を暴走させる……なんて悪行はおかさない。

「ジュリエット様。何を勘違いしているのかはわかりませんが、私は一切魔法を使おうとしていま

せん。たとえ、濡れ衣によって婚約破棄を言い渡されようとも、相手が王族でない他の誰かだとしても、危害を加えるような愚か者ではありません」

そうジュリエットに向かって言うと、ミカエル殿下が鼻で笑った。

「ハッ! ジュリエットにも危害を加えてはいない……そう遠回しに主張しているつもりか!」

「はい、ミカエル殿下。先程の罪状にはまったく心当たりがありません故、後日その証拠を提示していただいた上で、両家で交わした婚約について見直しをするべきです」

「なんだと! 証拠もなく、こうやって断罪しているのも思っているのか!? おい、ハールク!」

「はい、殿下」

ハールク様がどうやら用意済みの証拠とやらを突きつけようとする。

「いいえ、ハールク様。この場で見せる必要はありません。この場は、進級祝いパーティーであり、婚約を破棄する場として相応しくないはず。現在、偶然にも私の両親は領地に行っていますし、国王陛下も隣国に向かったばかり。まだ未成年である我々だけでことを進めてはいけない案件だ、ご理解いただけますよね?」

「……」

今年で成人年齢である十八歳にはなるが、まだその年齢を迎えていない自分達だけで、未来の国王と王妃になりうる二人の婚姻をどうするかなんて決定していいわけがないのだ。

なんとも都合主義なことに、両家とも当主が不在のタイミング。

まったく、最悪である。

不満げに顔を歪めるハールク様は、指示を仰ぐようにミカエル殿下に視線を向けた。ミカエル殿下も、少し悩んでいる様子だ。

「ジュリエット様」

その間に、私はジュリエットに向かって言う。

「先程、思い出しましたので、言わせていただきますが……」

トン、と自分の頭を人差し指で叩く。

「ここはゲームではなく、現実世界なのですから、夢を見るのはおよしになって」

ここは決して、ゲームの世界ではない。ゲーム感覚でいてもらっては困るのだ。

逆ハールムに近い状況とはいえ、恐らく本命はミカエル殿下だろう。

つまりは、私の代わりに王妃になる人生を歩もうとしているのだ。

今から王妃教育を受けるなんて、並大抵の努力では済まない。

好感度を上げる秘訣を知っているおかげで、攻略対象キャラを射止めることはできても、その他の現実にはチヨロくないのだ。

そういう意味で告げた言葉を、ヒロインことジュリエットは、心底理解できないようだ。不審げに顔を歪めている。ただ私にゲームの知識があることは伝わったのだろう、その目には驚きと憎しみがあつた。

肩を落としてしまう。

ヒロインがダメなパターンか。

どうして、こんなことになったのだろうか。

ヒロインポジションだからこそ、人生イージーモードと高を括って、傲慢になってしまったのだろうか。あるいは愛されたい願望が強すぎる魂が、乙女ゲーム転生をし、歓喜のあまり現実が見えないまま、逆ハールム展開に走ってしまったのだろうか。

現実的に考えて、逆ハールムなんて、よろしくないだろう。そもそも、攻略対象には婚約者がいるのだ。この先に待つのは、ドロドロな展開しかない。

このヒロインが招いた事態は、深刻だ。これから大変になる。もっと早くに前世の記憶が戻れば、このイベントを回避できたはずだが、仕方ない。

「ゲーム？ 何を言っているんだ」

ミカエル殿下が睨みつけてきた。

その声で我に返ったのか、ジュリエットはサツと表情を戻す。

「これ以上、罪を重ねないでください！ リガッティー様！」

私に罪を認めると、いかにも被害者っぽく必死に訴え、ヒロインぶるジュリエット。いや、本物のヒロインだったわ。

「元より、罪を犯しておりません」

きつぱり、と私は無実を主張しておく。無実を証明する自信があるので、堂々としていられる。「リガッティー様っ。あなたのためなのです！」

「よせ、ジュリエット。あの女には、罪悪感を抱く心もないのだ」

この場でしつかり婚約破棄を成立させたいのか、ジュリエットは被害者面をやめない。それをミカエル殿下が宥めた。

罪を犯していないのに、罪悪感も何もないでしょ。

「魔族のように閨属性の魔法を使う女に、心を痛めることはない。ジュリエット」

そう言っつて、ジュリエットの手を握るミカエル殿下に、カツとなった。

「僭越ながら言わせていただきます、殿下」

「なんだ？」

強い声で言い放つ私に、ムツとした顔をするミカエル殿下。

「今の発言は、魔族の方に対しても、閨属性を持つ者に対しても、相手を貶める、不当なものでした。大昔にはいみじくも合つたこともありますが、今やもう五百年は魔族の国と友好関係を保っています。この学園に入学するより前に、歴史で学んだはずですよ。お忘れですか？」

「なっ!? そんなつもりはっ」

魔族といがみ合つたのは大昔の話だと学んだことを忘れたのか、と直球で尋ねると、ミカエル殿下は顔を真っ赤にして怒る。弁解を始める前に、畳みかけた。

「この場にも、魔族の血が流れている生徒がいます。一国の王子が差別するような発言は慎むべきです」

「くっ……!」

そう。この学園の中にも、魔族はいるのだ。

一国の王子として、差別的な発言は恥ずべき行為だとしつかりと教えておく。

これまでも、自分の正義を貫くミカエル殿下に、それとなく間違いは間違いだと伝えてきた。それとなく、なのは、彼のプライドを必要以上に刺激しないためだったのだが、今回ばかりは寛容な態度ではられない。

「また、閨属性の魔法を悪のように決めつけるお言葉も、撤回していただけませんか？ 魔族の方々が比較的多く適性を持つ閨属性の魔法は、光属性と同様に希少で、決して悪の魔法ではありません。学園でもそう学んだはずですよ？ 偏見の入った発言は、撤回してくださいませ」

「お前っ！ 婚約破棄の報復に、オレに公衆の面前で恥をかかせたいのか!?」

ミカエル殿下は真っ赤な顔で震えながら、的外れなことを言い出した。

「いいえ、私は第一王子殿下に間違いを正してほしいと進言しているだけです。逆に、公衆の面前で婚約破棄を言い渡して、私を見世物にして恥をかかせることは、正当なですか？」

まったくもってブーメランである。

一瞬、私も恥をかいているという事実を認識して、狼狽えなければ。

「お前には断罪されるべき罪があるだろ！」

自分の行為は正当なのだと言い張りたいたいようだ。

「恥の上塗りはやめましょう」

「なっ」

私はため息を堪え、ツンと顎を上げて淡々と告げた。

「お戻りになった国王陛下の判断の下、この件を解決しましょう。お忘れですか？ この場は、学園の進級祝いパーティーでございます。これ以上の騒ぎは、生徒達はもちろん、付き添いの父兄の方々にも迷惑ですので」

色々忘れていて、と指摘しすぎたのか、迷惑をかけるなど諫められたのが気に入らないのか、ピキ、とミカエル殿下は顔を引きつらせる。

まるで、自分達が悪いような言われ方に納得がいかないという表情のヒロイン&逆ハーレム要員達に背を向けて、私は会場の皆に淑女の礼をした。

「進級祝いパーティーにご参加の皆様、大変ご迷惑をおかけして申し訳ございません。私はこれにて失礼いたしますので、どうぞ、祝いの会を再開してください。改めまして、皆様、進級をお祝い申し上げます」

本来は一番身分の高いミカエル殿下が謝罪すべきだけれど、私が代わりに謝っておく。

顔を上げて、にっこりと笑ってみせたあと、あとは任せたと学園長達に視線を送る。友人達にも

怒りは抑えるように、掌を下ろすジェスチャーを見せておく。

婚約破棄イベントは、強制終了。ミカエル殿下達は、不完全燃焼だろうが、私がいなくなれば喚いてもしょうがない。よって、彼らも帰宅する。

あとは、学園長達が進級祝いパーティーの再開に尽力するだけだ。

貴族の父兄も参加しているから、第一王子の婚約破棄騒ぎは社交界にあつという間に広がっていくだろう。……やれやれ、気が重い。

馬車で帰宅する。侍女達があまりにも早い帰りに戸惑っていたけれど、「疲れたの」と一言だけ伝えた。

進級祝いパーティーの翌日から、学園は半月の春休みだ。

だから、明日からしばらく学園に行かなくていい。

友人達を宥めるための手紙を、すぐに送らないといけないだろう。今まで、せっかくジュリエットの言動に我慢してきたのに、これを機に爆発されては火に油を注ぐようなものである。

でも優先事項はやはり、婚約破棄宣言をされたことについて、領地に行っている父と、隣国に向かった国王陛下に伝えることだ。王城で留守を守っている王妃様にも、こちらの言い分をしたためたものを送っておかないと、機嫌を損ねるだろう。

せっせと羽根ペンの形をしたボールペンで手紙を綴っていると――

「リガッティーお嬢様。ネテイト様がいらつしやっています」
義弟のネテイトも帰ってきたようだ。

知らせてくれた侍女に、書き終えた手紙を渡し、父と国王陛下、王妃様に魔法便で送るよう指示をする。厳重に管理されている魔法便は、紛失の心配がない。何より、即発便で、最短時間で届けられる。

その後、ネテイトの入室を許可した。

「友人達に手紙を書かなくてはいけないから忙しいの。何かしら？」

ペンを持ったまま、部屋に足を踏み入れたネテイトに用件を尋ねる。

「……ごめん……」

やや俯いたネテイトは、謝罪の言葉を絞り出した。

「何に對しての謝罪かしら？」

「つ……！ 進級祝いパーティーでの騒動を止められなかったことか！ エトセト子爵令嬢が闇魔法が暴走するとか騒いだことか！ 殿下の失言とか！ 止められなくてつ、ごめんっ……!!」
まくし立てるように言った義弟。

「……まとめて謝罪されたことに、びっくりしてしまった。

「……あら？ あなた、ジュリエット様の味方じゃないの？」

「そんなわけないだろ！ なんて義姉上の婚約者と親しくなろうとする令嬢の味方をするんだよ」

心外と言わんばかりに否定された。

「……違うのか。

「でも、あの場では、あちら側にいたでしょ」

「僕には、殿下の側近という立場がある。……仕方なくだよ。あちら側についているフリして、事態を逆転させるつもりだったんだ」

「あら？ 何か対策があったの？ それなのに、どうしてパーティー中にことが起こされたの？」
「だから謝ったじゃないか！ 最初はパーティーのあと、皆が帰ったところで、婚約破棄を言い渡すって殿下が息巻いていたんだ！ でも、あのエトセト嬢が、パーティーの最中にやるべきじゃないかって！ 早い方がいいとかなんとか、上手いこと殿下達を誘導してしまったんだよ！ 僕は最後まで反対したのにつ!!」

拳を固めて悔しげに嘆いたネテイトは、両手で顔を覆う。

「結局……公衆の面前で婚約破棄だなんて……大事になってしまった……ごめんなさい……」

「そうね……公の場で婚約破棄だなんて……もう頭が痛いわ」

私はこめかみをぐりぐりと揉んだ。

ネテイトとしては、当事者だけで済ませたかったのだろうが、なるべくゲームシナリオどおりにしたかったジュリエットに主導権を取られて、結局、大イベント化してしまったのだろう。

攻略されたミカエル殿下達を誘導するなんて、ヒロインには造作もない。

「でも、意外だわ。ジュリエット様の影響で、ネテイトは私を敵視していたのかと……ジュリエット様のこと、好きじゃないの？」

「好きだって!? 義姉^{あねうえ}上の婚約者で、しかも自分が仕える主人であるミカエル殿下に言い寄る合嬢に、好意を抱くなんておかしいだろ!？」

「……あなたが真つ当で感動してしまうわ……あちら側がおかしいだけなのよね、うん」

「まったくだよ!!」

ネテイトのジュリエットに対する好感度はマイナスのようだ。

プンプンしているネテイトが正常なことに感動してしまうくらい、ミカエル殿下達が異常なのだと実感した。

「ミカエル殿下と、ケーヴィン様とハールク様……婚約者がいる身で、誑^{たぶら}かされるなんて、本当に……ため息しか出ないわ」

と言いつつも、ため息を堪^こえる。現実逃避したい。

「僕は言ったよね? しっかりしてくれって! 義姉^{あねうえ}上^うがもつとミカエル殿下に進言してくれば、防げただろうに!」

「ああ。それで不機嫌だったのね?」

思い返せば、ジュリエットについて注意されていたっけ。しっかりとミカエル殿下に釘を刺せば、こうはならなかったと言いたいらしい。

「責任転嫁はやめましょう。私もネテイトも、最善を尽くしたはず。ミカエル殿下の性格を考慮して進言し、一国の王子として決断してもらおう。ミカエル殿下が正しい判断をしてくれると信じていた私達は、裏切られたの」

婚約者としてそばに立った時から今まで、優秀ではあるものの我が強いミカエル殿下が、誤った方に突き進まないように、私達は支えてきた。

最終決定を下すべきは、彼自身。そして、彼の選択が、この事態を起こしたのだ。

冷静に告げた私の言葉を受け止めて、ネテイトは重く頷^{うなづ}き、俯^{うつむ}く。

少し、沈黙した。

「ネテイト以外は、もうジュリエット様の味方つてことで間違いない?」

確認しておく。

「うん……」

頷くネテイトの顔には、嫌悪感が滲^{にじ}み出ている。

ジュリエットは、完全にネテイトの攻略をしくじっているようだ。苦笑してしまう。

「ケーヴィン様とハールク様の婚約者も、大変ね……」

そう零^{こぼ}すと、気まずげに視線を落とすネテイト。

どうやら、二人ともジュリエットとは友人以上に親密な雰囲気があるようだ。まったく。リアル逆ハールムなんて……ドロドロ。

「ネテイトは、口説き落とされなかったのね」
「やめてくれよ……」

げんなりされた。

うん、嫌いなよね、よくわかったわ。

「何故か、あの人が、僕が義姉上と不仲だと思って思い込んでいて、家族扱いされなくてつらかったらうって言い続けてくるんだ……だから、変な令嬢としか思わなかったし、ミカエル殿下に付きまとうから注意したら、義姉上に頼まれたのって……頼まれなくても義弟としても側近としても、注意するだろうに」

んー。ゲームシナリオどおりではない私とネテイトの関係を知って、私が転生者だと疑ったのかもしれない。

だからこそ、捏造した証拠を用意したのだろう。

「義姉上は、堂々としていたけど……無実を証明する自信があった？」

「ええ、そうよ。ネテイトも状況を覆す準備はできていたのね？」

「はい……」

「あちら側は、もちろん私の罪を証明するものを集めたのよね？ 次期宰相を目指すハールク様が提示しようとしたのだから」

「うん。ハールク様が証拠を揃えていた」

「……彼が捏造を？」

「……いや。……ただ、エトセト嬢と一緒に裏付けをしていた」

「……まあ、彼らを証かすくらいだものね、捏造くらいは簡単ね。傾国の美女って、彼女みたいな女性を指すのかしら」

苦い顔をするネテイトを見る限り、証拠集めをしたハールク様も、ジュリエットにいいように操られていたようだ。

未来の国王の相談役という重要ポジションになるはずのハールク様も、その未来の国王であるミカエル殿下も、ついでに最も近くで護衛する騎士となる予定だったケーヴィン様も……一人の令嬢に惑わされている。彼らはこれで失脚するだろう。

いくら、相手が彼らを籠絡するコツを知っていても、令嬢一人にここまで操られてしまうなら、国を任せるなんてできないと判断されるはず。

攻略対象キャラを何人も証かす悪賢さはあるけれど、未来と現実が見えていないのよね……あのヒロイン。

捏造した証拠で追い込み、そして闇魔法の暴走を誘発して、ゲームシナリオどおりにハッピーエンドを迎えたかったのだろう。

ヒロインは悪役令嬢から一回を守り、王太子となった王子様の婚約者となり、卒業後に結婚式を挙げて、めでたしめでたし。

……になるわけじゃないだろうが。

現実には厳しい。私もネテイトも、無実を立証できるし、それにより、ミカエル殿下達は跡継ぎに相応しくないと、大人達は判断を下す。ハッピーエンドなんてご都合主義展開は、ゲームだけだ。

ゲーム感覚で生きているバカが、現実を引つ掻き回した。ホント、迷惑。

「私達は、もう見切りをつけるってことでいい？ 第二王子のテオ殿下も、負けず劣らず優秀なのが、せめてもの救いね……彼も兄であるミカエル殿下を慕っていたから、酷くショックを受けるでしょうけど」

二つ年下の第二王子が、王太子になってくれるだろう。他に王子がいたのは、幸いだ。

ミカエル殿下は、成人を迎える今年、立太子するはずだったのに……無念。

「そうするのが賢明でしょ。僕達は降りかかる火の粉を払って、この事態を收拾すべき。ミカエル殿下の側近として……」

「私も婚約者として……」

二人で頷き合ったあと、肩を落とす。

今はまだ未成年なのに、こんな大きな問題に直面するなんて、骨が折れる。

「義姉上は……どうするつもりなんだ？ 僕は、侯爵家の跡取りとして育てられたけど、義姉上は王妃となるべく教育されたのに……公の場で婚約破棄だなんて……」

気遣うような目を向けるネテイト。

公の場で婚約破棄と断罪イベントがおこなわれ、もうミカエル殿下の過ちを貴族の多くが目にしてしまった。もう、ミカエル殿下が国王になることはない。従って私の王妃教育の成果は、発揮できないだろう。もちろん、婚約関係だって続けられるわけがない。

「そうね。どうするかは決めていないけれど、しばらくは傷心を理由に休ませてもらうかと。——まずは、事態の收拾よね。侯爵家の跡取りとして、ネテイトの手腕を見せてちょうだい」

侯爵家の跡取りであるネテイトに任せる。私は、何かあった時の保険だ。

私の今後は、どうしよう。

誰かに婿入りしてもらって、私の夫に次期当主になつてもらうという手もあるけれど、その気はない。

跡取りとして頑張ってきたネテイトの努力を無駄にはしない。

「……はい。任せてくれ。義姉上」

ネテイトは覚悟を決めた目をして、深く頷いた。

「僕は王城で部屋を借りて、しばらく過ごすことになった。あの女、ゴホン、かの令嬢が、義姉上が僕に危害を加えるかもしれないから心配だと騒いでいるんだ。殿下にも、陛下が戻るまで王城にいるべきだと言われた」

あの女呼び……よっぽど嫌いなね。ネテイト。

ジュリエットは、私がゲーム知識を利用してネテイトを味方につけるんじゃないかと心配してい

るのだろう。私から引き離すのは、その阻止策。

「殿下はなんで、七年も付き合ひがある義姉あねうえより、あんなポツと出の令嬢の肩を持つのやら……」
心底理解できないと言わんばかりに、ネテイトは深いため息を零こぼした。

うーん。二人が親しくなつたきつかけは、クラスで席が隣になり、授業のペアになつたことなのよね……

ネテイトが知らないだけで、きつとミカエル殿下はすでにジュリエットと甘いひと時を過ごし、恋人関係にあるはず。なんていったつて、ゲームのタイトルに『甘い』つて入っているのだから。

ジュリエットも本命はミカエル殿下だけれど、きつと残りの二人とも、それなりに甘い時間を過ごしてるんじゃないかしら。

学園は、身分の隔へだてなく、交友関係を広げ、切磋琢磨せつさたくまする学びの場。

とはいえ婚約者がいる身なら、他の相手と恋愛をするべきじゃないのは、常識なのに。

ヒロインもヒロインで、節操なしとしか思えない。

「恋は盲目もうもくかしらね。ネテイトと私は家族で、同じ家で過ごすから、心配なんですよ。あるいは、ジュリエット様はあなたが敵になることを恐れているのかも」

「ええ、そうでしょうね。なので、行ってきます。義姉あねうえ上も、気を付けて。さらに義姉あねうえ上に罪をきせようと仕掛けてくる可能性がないとは言えないので」

「わかつたわ。ネテイトも気を付けて」

ジュリエットの味方ではないことがバレないように、ネテイトはあえて敵陣に身を置く。

ちよつと心配ではあるけれど、上手く立ち回れると信じて、送り出すことにした。

軽く頭を下げて、部屋を出ようとするネテイトを、私は呼び止める。

「ネテイト。ありがとう、私の味方でいてくれて」

ネテイトだけは、惑わされることなく、私を信じていてくれた。

「つ！ 家族なんだから、当たり前じゃないか！ お礼を言われることじゃない！ 当然のことだ！」

ネテイトは顔を真っ赤にして、つんけんした態度で言い返す。

「ツンデレシヨタ」

「え？」

「いえ、なんでも」

さすがツンデレシヨタ梓だとしみじみ思つて、つい口に出してしまつたが、聞こえなかつたみたいでよかつた。

ツンデレはともかく、シヨタなんて言つたら、小柄なことにコンプレックスを抱いているネテイトが、激怒してしまう。

手を振り、照れて頬を真っ赤にしているネテイトを送り出す。

一人になつた部屋で、頬杖をついて、ぼんやりと考える。

王妃になるために努力してきたけれど、おじやんになった。可愛い義理の弟になるはずだったテオ殿下にはすでに婚約者がいるから、当然、私は宙ぶらりん状態となる。

考えているだけでは、らちが明かない。

私は盛大にため息をついたあと、気晴らしでもしてから、また考えようと決めた。

「――冒険でもしようかしら」

窓を見つめて、そうポツリと零した。

第2章 悪役令嬢は冒険者になろうかと。

1 いざ冒険者登録。

昔から、魔法には強く興味を引かれていた。

この世界では身近にある魔法だけれど、前世にはなかったものだからだろうか。知らず知らずのうち、夢中になっていた。

魔法の勉強を中心に過ごしていたのに、第一王子の婚約者に選ばれて、王妃教育を受けないといけなくなり、げんなりしたものだ。

とはいえ、贅沢な環境で暮らし、そして学んできた身だから、貴族の責務として、決められた未来をしつかりと受け入れた。

なのに、七年も支えてきた婚約者に、裏切られようとは。

優秀だったし、期待も大きかったのに……もうあのオレ様王子、廃嫡されてしまえ。

王妃候補といえど、もう公の場で婚約破棄を言い渡された私は、傷物令嬢である。

今後はどうなることやら。王妃教育には当然機密事項もあったから、自国の不利になる情報は明

かせないように魔法契約書にサインさせたあと、他国の王族に嫁がされるのかな……

可能性としては高そうだけど……ひとまず傷心を盾に、少しの間だけでも気晴らしをさせてもらおう。

なんなら、来年の学園卒業まで、自由をねだる。

傷物にされたのだ。それくらい、ねだる権利はあるだろう。

そんなこんなで、とりあえず、私は冒険者になることにした。

そう、気晴らしである。

ゆくゆくは王妃になる身では、決して許されなかったが、今がチャンス！

冒険者登録をして、冒険してこよう！

学園の生徒の中にも、冒険者登録をしている者がいると聞いたことがある。貴族子息が、戯れとして冒険者登録をすることもあるらしい。平民の生徒は、学園で剣術や魔法を学び、冒険者として活躍をして収入を得ているそうだ。

つまり学園の規則に、冒険者になつてはいけない、なんて項目はない。

そして、もう王妃になる身ではない。

だから冒険者になろう！

そういうわけで、友人達に下手な行動をしないようにと釘を刺す手紙を魔法便で送ったあと、我が家の使用人を玄関ホールに集めた。

「外からの情報で混乱が起きないように、私の口から伝えるわ。先程、進級祝いパーティーで、婚約者である第一王子殿下に婚約破棄を言い渡されたの」

あまりの衝撃に、使用人一同は反応すらできず固まっている。

水を打ったように静かな場で、右手を上げて、掌を見せる。落ち着いて、という意味を込めて。

「理由は、犯してもいない罪——冤罪よ。ネットイトも、この件に対処するために、しばらく留守にするの。お父様達を呼び戻す手紙も送ったわ」

ざわつと使用人達がようやく反応を見せたところで、ネットイトがちゃんと動くことをしっかりと告げる。

使用人達は私が冤罪で婚約破棄をされたと聞き、怒りや嫌悪を感じているようだ。

仕えている家のお嬢様が、そんな目にあうなんて、怒りも覚えるか。特別親しいわけではないが、慕われているとは自負している。

「ファミラス侯爵家は、揺るがないから安心して、今までどおりに働いてほしい」

「かしこまりました」

使用人を取り仕切る家令が、腰を折って一礼した。彼に任せれば大丈夫だろう。

そして、彼を含む大半が、私に労るような視線を向けてくる。

「よろしく。私も、正直傷付いたわ。そつとしておいてほしい」

「はい……お嬢様。お嬢様が心を休められるように、我々は煩わせないようにいたします」

「ええ。ありがとう、みんな」
微笑んでおいた。

よし。これで過剰に気遣われないわ。

翌朝。私は朝食を取ったあと、部屋で一人で休みたいと、専属侍女に伝えた。

一人になった私はすぐさま、剣術の授業などで着るズボンとブラウスとジャケットに着替える。

『気晴らしに出掛けてくるわ。夕食には戻るから、心配しないで。リガッティーより』

そう書き置きを残して、私は窓から出掛けた。

心配しないで書いたが、婚約破棄された直後では説得力はないだろう。

絶対に、侯爵家の騎士団を動かして捜索する。

でも、冒険者登録をしに行くなんて、予想できないはず。

全力疾走でまず向かったのは、庶民向けの衣料店だ。

店内をザツと見回して、見繕った服を試着し、そのまま購入して店をあとにした。元の服装では、誰から見ても、乗馬服を着た貴族令嬢にしか見えない。

着ていた服は、【収納】魔法でしまった。私の【収納】は、あまり広くないけれど、服くらいは余裕でしまえる。

次は、魔法薬店。

イメチェンのために魔法薬を購入。【変色の薬】の青髪バージョン。

その場で、グビツと呷った。

紫色に艶めいていた黒髪は、鮮やかな青色に染まる。少々ボリウムのあるストレートヘア。ちなみに、瞳はアメジスト色。服装は、短パンと黒のニーソックス。ダークブラウンのブーツは、屋敷から履いてきたもの。履き慣れたものがいい。タンクトップの上に、丈の短いジャケット。この髪色と格好なら、リガッティー・ファマスだなんてバレやしない。

魔法薬は効果を消すものと青色の髪に変えるものを、買えるだけ買って、収納。

続いて、武器屋。練習用の剣は、置いてきた。だから、冒険用の新しい剣を買っておく。

手頃なものを直感で選んで、腰に携えたら、いよいよ冒険者登録のために、冒険者ギルドに足を運んだ。

冒険者であろう人々でごった返したギルド会館は、広かった。中には、博物館みたいに貴重な魔物のはく製が展示されている。それを流し見しつつ、受付カウンターの列に並んだ。見たところ、冒険者登録専用のカウンターはない。だから、ここに並ぶべきだろう。

「こんにちは。冒険者登録をしたいのですが」

順番が来たので、用件を告げる。

「はい。まず、年齢を教えてください。虚偽はすぐに発覚するため、正直に申告してくださいね」
「十七歳です」

「登録可能な年齢ですね」

金髪の物静かな雰囲気美人受付嬢は、一つ頷いた。

冒険者になれる年齢は、十五歳からだったかしら。

「では、ご説明します。これから、部屋を変えて身元を調べさせてもらい、登録いたします。前払いで登録料を支払っていただきますが、問題が起きて登録ができなくても、返金はされませんので、ご了承ください。無事、登録が完了したあと、冒険者の証あかしであり、冒険者ギルドを利用するために必要不可欠であるタグを発行しますので、その取り扱いも説明いたします。その後は、Bランク以上の冒険者とペアを組み、合計三十日の指導を受けていただきます。ここまでで質問は？」

「冒険者のランクについて知りたいです」

「はい。誰しも例外なく、新人はFランクから始めます。条件を満たせば、ランクが上がる仕組みです。下からF、E、D、C、B、A、Sとなっていて、ランクごとに依頼の難易度も異なります」

ランクの書かれた紙を指でさして、文字を追わせる受付嬢。

FからSまでか。この世界では使われていないアルファベットでランク付けなんて……きつと、元地球人がこのランクを設定したに違いない。

「個人だけでなく、冒険者同士で活動をするグループで登録すると、パーティーとしてもランク付けがされます」

「なるほど。パーティー登録でのランクも条件を満たせば上がっていくのですか？」

「そのとおりです。そちらは、パーティー登録の際に説明します。または、パーティーメンバーから教えてもらってください」

「わかりました。とりあえず、個人の登録をお願いします」

受付嬢に「こちらです」と案内された部屋には、机があり、その上に人工的に作られた石の台が二つ置かれている。鑑定のための魔導道具に似ているから、きっとこれで素性を調べるのだろう。ウイン、と分厚い方の石が青い光を灯す。

「この台に手を置いてください。口頭で質問に答えていただければ、真実のものが記録されます。偽りを答えると赤く光ります。その時点で登録は取り消しになりますので、ご了承ください」

「はい。それが……タグですか？」

受付嬢の手に、クリスタルのような長方形のものがあつた。人差し指より、少し大きいぐらいのもの。いつの間。

「そうです。登録したのちに、お渡しするものになります。繰り返しになりますが、こちらは冒険者ギルドを利用するために、必要不可欠です。紛失の際は、速やかに報告をしてください。悪用される前に、新しいものを発行して、古いものは使用できませんので」

「つまり……登録した情報は、タグだけではなく、ギルドにも保管されるのでしょうか？」

「もちろんです。地方のギルド支部と共有し、他国での冒険者活動なども記録しますのです」

それもそうか。

納得して、また頷く。

クリスタルのようなタグを台の中央に置いた受付嬢が、青い光を放つ台に手を置くように促してくる。

口頭で答えたプロフィールの真偽を確かめたのち、タグに情報が書き込まれる仕組みなのだろう。ハイテク魔導道具。

私は手を伸ばしかけて、止める。

「個人情報、ギルド職員なら誰でも閲覧できるのでしようか？」

「問題が起きて必要に迫られれば、ギルド職員が冒険者の情報を閲覧します。冒険者活動における報告などで対応するギルド職員の目には入りません。私のように、登録のために対応をしたギルド職員は知ってしましますが、他言はしませんのでご心配には及びません。ここ王都の冒険者ギルド本部のギルドマスターとサブマスターはいつでも登録されている情報を閲覧できますが、通常はリンクアップの決定を下す際に見る程度です」

個人情報（オウゴウ）の漏洩（ロウゲツ）を心配する私のために、受付嬢はにこりと笑って答えてくれた。

「そうですか……。では、新人の指導を受け持つ冒険者にも、情報は渡さないのですか？」

貴族令嬢だと知られると、お客様扱いされてやりづらそう。ファミラス侯爵家は、当然の如く有名な貴族だ。

「渡しません。指導者には、ご自分の判断で教えてください。ただし、名前を偽ることはやめてください。指導報告の際に、他の名前を出されてはギルド職員が混乱してしまいます。他は、好きなように構いません」

「ええつと……家名は伏せておきたいのですが、指導役の方に伝えるのは名前だけでも大丈夫でしょうか？」

「はい。正しい名前さえ伝えてもらえれば、区別ができるので大丈夫です」

それなら、と胸を撫で下ろす。指導役の人に貴族令嬢だとバレることはなさそうだ。

やっと私は台の上に掌（てのひら）を乗せた。ちよつとひんやりしていて、魔力を感じる。魔石によって稼働させているためだろう。

「それでは、お名前をフルネームでお答えください」

「リガッティ・ファミラスです」

ピクリ、と受付嬢の眉が上がった。が、すぐに小さな微笑みを浮かべた顔に戻る。柔和な接客スマイルを維持。プロだ。

やっぱり、侯爵家の令嬢だつてわかつてしまったか。だが、これで個人情報の漏洩（ロウゲツ）を気にした理由をわかつてくれただろう。

その後、生年月日から犯罪歴まで、質問をされて答える。使える魔法の属性も登録するのは、少々驚いた。リンクアップの際に、必要な情報なのだろうか。

最後まで、赤い光は放たれなかった。

「以上になります。問題ないので、タグに情報を登録します。少々時間がかかりますので、待合室でお待ちください。後ほど指導者を連れていき、タグをお渡しします」

奥の扉をくぐって、廊下を進んだ先にある一つの部屋に案内される。ここが待合室らしい。必要最低限のものしか置かれていない部屋は、ソファと脚の短いテーブルがあるだけ。遠慮なくソファに腰を下ろして、待つことにした。

どんな冒険者が指導してくれるのだろうか。

貴族令嬢だとバシないように、なるべく気安く接しておこう。

せいぜい、育ちのいいお嬢様程度の喋り方にしないと。

登録時に犯罪歴の有無を聞かれるから冒険者に極悪人はいないだろうけど、私は一応高貴な身分なので、身代金要求のために捕まったりしないようにしないとけない。

幸い、一般市民だった前世の記憶を取り戻したし、肩の力を抜いていれば、さほど難しくないだろう。

——コンコン。

ノックに反応して返事をする、扉が開かれた。

入ってきたのは、短い白銀の髪とルビー色の瞳を持つ美青年だ。

ミカエル殿下達も、乙女ゲームの攻略対象キャラだから、当然の如く美形だったけれど、この人

もそれに引けを取らない美形だ。

右側に流すような髪型は爽やかさを感じる短さだし、白銀色の髪は眩しさを覚えるほど。

アーモンド型の目は、白銀色の睫毛に囲まれていて、明るい赤色の瞳は光に透かしたルビーのよう。健康そうな顔には、欠点が一切見当たらない。

襟が立った赤黒いジャケツトの下に、白いシャツ。黒いズボンを穿いていて、裾をインしたブーツはゴツイ。体型はやや細めに思えるけれど、立派な長剣を腰にぶらさげているので、着痩せして見えるだけだろう。

「こんにちは。リガッティーです」

彼が指導担当の冒険者だと思い、立ち上がって挨拶をした。

けれど、彼はボカンとした顔でその場に立ち尽くしている。

どうしたのか、と首を傾げてしまう。

すると、彼は私の頭から足元まで見て、再び私の顔を凝視してくる。

「美少女で驚きました？　なんて」

冗談を言って、笑ってみせる。

そういえば、私は美少女だった。注目を浴びることに慣れすぎて、忘れていたけれど、見惚れられるほどの美貌を持っている。しかし、彼だって周囲の目を奪う美形だ。毎朝鏡を見ていたら、美形耐性がつくのではないだろうか。



私は攻略対象キャラを筆頭に、学園でも社交界でも、美形は見慣れているので、固まることはない。喜んで鑑賞はするけれど。

「あ、うん……可愛すぎてびっくりした」

白銀髪の美青年は、コクリと頷いてそう答えた。

「あはは、嬉しいです。あなたも、美形でびっくりしましたよ。指導役の方で間違いないですか？」
冗談だったのに、心底そう思っているみたいな言葉が返ってきたので、素直に嬉しいと笑う。

彼の後ろにいた先程の受付嬢が頷いた。

「はい。彼が、指導者となります」

何を突っ立っているんだ、とジト目を美青年に向け、軽く背中を押す受付嬢。
彼女の手にはトレイがあって、私のものであろうタグがそこにあった。

まずは自己紹介をするべきだと受付嬢が促す。親しい仲なのか、私に向けるものとは違って、厳しい目をしている。

「あー……Aランク冒険者のルクトだ」

「改めて、リガッティーです。よろしくお願いします」

「ああ、よろしく」

指なしの革手袋を嵌めた手を差し出されたので、両手で包むように握手した。

「では、リガッティーさん。タグに魔力を込めてください。それで登録完了となります」

テーブルの上にのせたトレイから、タグを取り、言われたとおり、魔力を注ぐ。
——ウイン。

タグに青白い光が灯って、消えた。
「リガッティーさんの魔力を込めたことで、本人確認ができるようになりました。これで登録完了です」

「これで冒険者ですか？」

「はい。おめでとうございます」

「やったっ」

冒険者になれた。受付嬢がにこやかに祝福してくれる。

そんな私を、じーっとルクトさんが見つめてくる。

ん？ 登録だけで喜びすぎたと呆れたかしら？

視線の意味を問うように見つめ返すと——

「よかったな」

そう笑ってくれた。

うん。イケメンは笑ってもイケメンである。

彼にも、お礼を言っておく。

「では、ここからは指導役のルクトさんに任せます。——何か質問はありますか？」

「あ。このタグは……身につけておいた方がいいのですよね？」

「はい。その方が都合がいいですね。紛失しないように【収納】魔法でしまっている方もいますが、穴をあけてネックレスにしたりブレスレットにしたりして身につける方が多いです。ここギルド会館のホールの奥に、専用の穴をあける魔導道具がありますし、チェーンも販売していますよ。保管するためのポーチもあるので、お好きなものを選んでください」

「なるほど、わかりました。あとはルクトさんから学ばいいのですよね？」

「ええ。あとは、指導者に任せます。しかし、何か不安があれば、私達ギルド職員にお声がけください」

私に優しく笑いかけた受付嬢だが、ルクトさんに顔を向けるなり、威圧的な笑顔になった。
しっかりと指導しろ、と釘を刺しているようにしか見えない。

微笑笑を零したルクトさんは「任された」と答えている。

私ももう大丈夫だという意味も込めて「対応、ありがとうございます」と受付嬢にお礼を述べた。

受付嬢はトレイを持って一礼すると、部屋をあとにする。

ルクトさんが向かいのソファに腰を下ろすから、私も座った。自己紹介や軽い説明でもするの
だろうか。

先に質問させてもらおう。

「ルクトさんはとても若く見えますが、Aランクの冒険者になったのはいつですか？」
「二年前くらい。今は十八歳、今年で十九になる」

「え!? 私の一個上ですか!? 二年前ってことは、十六歳でAランク? 冒険者登録ができるのは十五歳からなのに、どうやってそんなに早くAランクになったのですか?」

二十歳くらいなら、まだ納得できたけれど、あまりにも年齢が近すぎて驚いてしまった。

「口元を手で隠しつつ、ただただ疑問に思っ、尋ねてみる。」

「ははっ。オレ、自分で言うのもなんだけど、最速ランクアップ冒険者として有名なんだ。もちろん、最年少のAランク冒険者としても」

私の驚きようを軽く笑いながら、そう教えてくれた。

「わあ。そんな冒険者のルクトさんが、新人の指導ですか……」

んー。遊び半分で冒険者になった私の指導担当をするには、大物すぎないか。

もしかして、侯爵令嬢だから、大物冒険者が担当することになったのかしら……

「実は、Sランクにアップするには、新人の指導をこなすことが条件になっているんだ。オレの実力はとくにSランクに相当するって、ギルドマスターにお墨付きをもらっているんだけど……規則だからさ。後回しにしていた条件を満たすために、やっと新人の指導をすることにしたのさ」

「なるほど……そんな条件があるんですね」

「そ。ランクアップの条件は、おいおい教えるとして……。まずは、どうして冒険者になることに

したのか、教えてくれる?」

本当かどうかわからないけれど、とにかくルクトさんは冒険者として有能らしい。

そんなルクトさんが、膝の上に肘を置き、真面目な眼差しで質問してきた。

ううっ。申し訳ないな……

「白状すると、気晴らし感覚で冒険をしようと思い、冒険者登録をしました」

ルクトさんは目を丸くしている。

「ああ、すみません! ルクトさんはSランクになるために新人の指導をするのに、その新人が遊び半分なのは、気分が悪いですよ。不真面目に活動するつもりはないですけど……私の担当、やめておきますか?」

うーん。大物すぎるルクトさんには、正しい意味で役不足だろうから、担当を替えてくれてもいい。

「フツ……いや、別に悪いとは思わないさ。リガッティーもオレが担当でいいなら、指導役を務めるよ」

何が面白いのか、ルクトさんは片方の口角を上げて、意味ありげに笑った。

「Sランクになるルクトさんの指導を受けられるなら、光栄です。ぜひ、お願いします」

かっこいいし、強いし、かっこいいし。快く指導してくれるなら、お願いしたい。

「決まりだな。そう罪悪感を覚えなくてもいいさ。遊び半分とか、とりあえず腕試しに登録すると

か、よくあることだから」

「あー……なるほど、わかりました」

そういうえば、貴族子息もそんな感じで登録しているのだけ。私だけではないと、ちょっと安心する。

「んーと。説明をしつかりすれば、あとは指導者の判断で活動を始めていいんだけど……新人時代のオレの場合、すぐに魔物と対決したくて、そのまま王都の外の魔物出没区画で実戦をしたんだ。リガッティーはどうしたい？」

「あ、可能なら、私も実戦をしたいです」

「そーこなくっちゃ。じゃあ、行こう。でも、オレは指導者だから、ちゃんと言うことに従ってくれよ？」

「はい！」

「ははっ、いい返事」

愉快そうにルクトさんは、笑い声を上げた。元からよく笑う明るい性格の人なのだろうか。

「あ。今更ですが、呼び方はルクトさんで大丈夫ですか？ 先生にしておきますか？」

「先生って呼ばれる柄じゃないから、それでいいさ。オレも今更だけど、呼び捨てでよかった？」

「ええ、大丈夫ですよ。ルクトさん」

「じゃあ、リガッティーのまままで」

互いに立ち上がって部屋を出ると、ルクトさんが笑っているのが見えた。鼻歌をうたいそうなほど、ご機嫌な足取り。

その様子が気になりつつも、後ろをついていく。

一階のホールに戻ると、ルクトさんは右の壁際で足を止めた。ずらりと透明な板がいくつも並べであり、そこに依頼内容が浮かび上がっている。依頼掲示板コーナーだ。

「これは一般的な依頼掲示板だ。受けたい依頼の下にあるプレートにタグを当てる。それで依頼を受けることになる。達成したら受付で報告して、またタグを当てて完了って流れ」

「ほほう……ハイテク」

「え？」

「ああ、いえ。素晴らしい魔導道具だと思えます」

ちょうど依頼を受けようとしている冒険者がいたので、見てみる。

透明な板に依頼内容が浮かんでいて、すぐ下のプレートにタグを当てている。やがて、表示されていた依頼が消えた。どうやら、誰かが引き受けると、板の依頼内容は消えて、他の依頼内容が浮かぶ仕様になっているようだ。

ちなみに、引き受けた依頼内容を再確認するには、隅っこの台にあるプレートにタグをかざせばいいらしい。出先で確認するための持ち運びできる魔導道具も、ここで売っているそうだ。

「自分より高いランクの依頼は受けられない。下のランクの依頼なら可能だ。低いランクの依頼で

依頼達成回数を稼ぐことも許されてる」

「やっぱり、依頼達成回数も、ランクアップの条件にあるのですか？」

「ああ、もちろんだ。まあ、量より質で、自分に合ったランクの依頼を達成した方が効率がいい」
コクコクと頷いて、理解していることを示す。

ちなみに、ここに表示されている依頼は、一般公開しても差し支えないものだけ、とのこと。
あまり人の目に晒さらしたくない内容の依頼の場合は、専門の受付から紹介されるらしい。

その場合は、報酬金額が上乘せされているため、金策としてそちらを選ぶ人が多いという。

依頼内容の例として、希少な薬草や素材の採取が挙げられた。要は、それが他の者の手に入らないように、秘密裏に取りに行つてほしいということらしい。入手可能な場所などの情報は、依頼を受けてから得られる仕組み。あらかじめ、その場所の危険要素などは明かされるらしいけど。

そちらの方は、また次の機会に教えてあげると、ルクトさんは約束してくれた。

「で。今日の依頼はどれがいい？ 実戦がしたいなら、やっぱり依頼をこなそう。魔物と関係ない採取でもいいけど」

「魔物出没区域に行くなら、どちらでもいいのですが……初心者に相応ふさわしいものがわかりませんので、ルクトさんを選んでほしいです」

「オッケー」

「……」

「ん？ 何？」

ルクトさんを選んでもらおうと頼んだ際に彼を見上げて——そのままじーっと凝視してしまう。

それに気付いたルクトさんは、首を傾げた。

「ルクトさんは、背が高すぎます」

「え？ 身長に苦情を言う？」

「ええ。背が高くて美形なので、すごく注目を浴びていますよ」

周りの冒険者がちらほら、ルクトさんに視線を向けている。注目を浴びすぎだ。

私も平均よりは身長がそこそ高いのに、ルクトさんのことは見上げる形になる。ミカエル殿下よりも高い。

長身イケメンめ。あと、横顔も美形すぎる。一日中、鑑賞できるわ。よくよく考えたら、ドタイプの顔では……？

「だから、オレは有名なんだって。それに、美少女と並んでるから、余計注目を集めてるんだよ。オレだけのせいじゃないぜ」

くつくつと喉で笑って、ルクトさんは依頼を探すために、目を動かす。

……否定はできないわ。

有名な美しいルクトさんの隣に美少女がいるから、余計気になるのかもしれない。

「何？ 元カ、元カより、身長が高すぎる？」

「元カレ？ 私に元カレなんていませんけど」

急に元カレなんて話を出されて、怪訝な顔になってしまう。意味がわからないと首を捻るけれど、何故か話を出したルクトさんまでギョツとした顔をしている。

「今付き合っている恋人と比較するならともかく……何故、破局した相手と？」
「あー、いや……言い間違えただけだ」

首の後ろを掻いて、ルクトさんは誤魔化す。

なんで元カレがいるなんて思ったのやら。そんな会話はしていないし、素振りだつて見せていないのに。

「じゃあ、今カレと比較？」

「いえ。そもそも恋人はいません」

「……可愛いのに」

質問に答えたら、ルクトさんがニヤリとした。

美少女だから、当然恋人がいるという先入観があつたのだろうか。だがしかし……何をニヤついているのやら。

「ルクトさんには？」

「オレ？ いないよ。冒険で忙しくて」

「……かっこいいのに」

「あはは」

さっきのお返しだとわかつたのか、ルクトさんは笑い声を上げた。

「ルクトさんって、普段からよく笑うのですか？」

「ん？ 楽しげりや、普通に笑うっしょ」

「……なんだか、笑いすぎに思います。この五分ほどの付き合いなのに」

「リガッティーと話すのが楽しいからさ」

その様子が、妙に引つかかるのは、何故だろうか。

楽しげに笑う横顔を見ると、ルクトさんが一つの依頼を指差した。

ルクトさんが選んだのは、薬草採取の依頼だ。

「この森にも魔物が出る。魔物と戦って、ついでに薬草採取を経験しておこう」

「わかりました」

ちゃんと依頼内容を読んで、頭に入れる。

指定された森の中に生えている毒消し効果のある薬草を最低十本、採取してほしいという依頼。

依頼主は、個人経営らしき魔法薬店のようだ。

冒険者から材料を得て、魔法薬を作り、売るのがだろう。

ギルド職員が冒険者から依頼の品を受け取ると、依頼主に連絡が行き、あとは直接渡したり、配達手配したりするそうだ。